

山谷詩の日本禪林における受容状況 ー山谷詩漢文抄中の文学用語「味外味」を例として

H31海人4

派遣先 中古より近代に到るまで、写本文化と異文化交流 国際学術検討会
(中国・北京)

期 間 2019年8月23日～2019年8月25日(3日間)

申請者 名古屋大学 大学院人文学研究科

博士候補研究員 大 島 絵 莉 香

海外における研究活動状況

研究目的

中国・宋の黄庭堅(号は山谷。以下、山谷と称す)の詩集は、本邦の中世の禅僧らに愛読された。その結果、禅僧らは山谷の詩集『山谷詩集注』(中国・宋の任淵による注釈が附されている)を底本とし、解説書である抄物を制作した。

本研究の目的は、山谷詩の抄物のうち、主に漢文で書かれた抄物を取りあげて、山谷詩漢文抄において、山谷詩に対して附された文学用語である「味外味」の対象となる詩句や評価基準が、中国の詩論書とはいかに異なるかを分析して述べることである。

海外における研究活動報告

国際シンポジウムについて

2019年8月24日(土)から25日(日)まで、中国・北京大学の外国語学院において、国際シンポジウム「從中古到近代：寫本與跨文化」国際学術検討会が開催された。同シンポジウムは、刊本と同様に写本文化が人類の文化の伝承や発展に重要な意義があるという理解を深めることを目的とし、中国の北京大学東方文

学研究センター、カナダのプリティッシュコロンビア大学の仏教学論壇、日本の京都大学人文科学研究所の術数学研究会を中心とする参加者があった。申請者は、8月24日(土)に「山谷詩在日本禪林接受の情況—以山谷詩漢文抄中の文學術語“味外味”爲例」の題目で口頭発表をした。

申請者の発表内容について

中世において多く編まれた抄物とは、所謂解説書のことである。抄物は、二種類に大別でき、その解説文である抄文の大半をカナで書かれたものをカナ抄、大半を漢文で書かれたものを漢文抄という。

申請者がとりあげた山谷詩漢文抄は、本邦禅林における山谷詩解釈の実態を把握するための資料である。現存する山谷詩漢文抄は、成立の早い順から、相国寺の万里集九(1428～?)『帳中香』、建仁寺の月舟寿桂(1470?～1533、号は幻雲)『山谷幻雲抄』、東福寺の彭叔守仙(1490～1555)『山谷詩集注』がある。この三漢文抄が底本として用いたのは、山谷の詩集に宋代の任淵が注を附した、『山谷詩集注』20巻・目錄1巻である。『山谷詩集注』は、本邦の南北朝時代に五山版も刊行され、広く通行していた。

本発表では主に、本邦中世の禅僧らが山谷詩を分析するうえで、重要視した文学用語、「味外味」(晩唐の詩人である司空図による詩論書、『二十四詩品』由来の文学評語である。「味外味」は、主には“言外の味”と解される)に着目し、その評価の対象となる詩及び理由について、中国における詩の評論書と、山谷詩漢文抄における禅僧の説との間には、いかなる違いがあるのか、実例をとりあげて比較検討した。

その結果は、下記のようにまとめられる。

『帳中香』に引用された、南宋・胡仔による詩論書『苕溪漁隱叢話』は、「味外味」の対象を、詩が描いた場面の他に、別の背景と奥行きのあるものとしていた。

一方で、山谷詩漢文抄において、「味外味」の対象となったのは、いずれも盛唐・杜甫の詩の影響下にあって作られた詩であり、杜甫がかつて用いた詩句を、後の詩人が鍛錬して自らの詩句を作る際に、詩のどこでどの語を用いるか、また、その句を詩のどこで用いるかと

いう布置が評価基準とされたようである。この評価基準は、山谷自身が提唱した、「点鉄成金」の影響を受けたものであろう。

今後は、「味外味」と類似した文学用語、「滋味」の評価対象となった詩の評価基準についても、中国の詩論書と日本の山谷詩漢文抄でいかなる違いがあるかについて明らかにしたい。

謝辞

今回の国際シンポジウムに参加することにより、申請者が普段参加する学会ではお目にかかることのできない先生方から、申請者の今後の研究の方向性について、貴重なご意見を賜ることがありました。また、他のシンポジウムへのお誘いもあり、大変有意義な時間を過ごすことができたと考えております。

末筆ながら、国際シンポジウム発表のための、海外渡航を助成してくださいました、村田学術振興財団に心より御礼申し上げます。